F2-44

湘南サナトリウムにおける近代メディカルツーリズムに関する研究
—（その４）斎藤緑雨を通して見た割烹旅館「東屋」の療養下宿としての姿—
Study on Modern Medical Tourism about Shonan Sanatoriums
—(Part４)Focusing on a recuperation lodging of “Azumaya” From Ryokuu Saito’s note—

○安齋七風[1]，押田佳子[2]，倉津耕大[1]
*Tsukasa Anzai[1]，Keiko Oshida[2]，Koudai Kuratsu[1]

Abstract: We investigated the substance of Azumaya as recuperation lodging. As a result, it is clarified that tourists and patients were used with facilities space in Azumaya.

１．背景および目的

前項において，療養下宿「魚民館」の衛生管理が行き届いていた背景には，南湖院による衛生指導や看護婦の育成および派遣を行うなどの地域貢献活動の実態が認められた．その結果として，本来迷惑施設となり得るサナトリウム※1・南湖院が，比較的地域で受け入れられた様子が窺えた．しかしながら，これは極めて稀有な例といえ，一般的には地域住民からの反対運動などにより，サナトリウム建設が滞ることも多かった[1]．具体的には，近代湘南において唯一サナトリウムが建設されなかった藤沢地域が挙げられるが，一方で，神奈川文学史年表などにおいて藤沢地域に滞在する結核患者の記録は多くみられる[2]．この滞在場所として多用された割烹旅館東屋は，夏期の海水浴や避暑の滞在客が訪れる地元の高級旅館として有名であったが，冬季などの閑散期の空室対策から患者の長期滞在を受け入れる様になった．記録上，東屋が受け入れた最初の結核患者が作家の斎藤緑雨とされ，彼の幅広い人脈は見舞客のみならず，その後文壇の結核患者を東屋に誘うに至り，最終的には東屋が結核療養者と一般観光客が一堂に会すつまり藤沢におけるメディカルツーリズムの中心機能を担う場となったとみられる[3]．そこで本稿では，旅館東屋の療養下宿としての姿に着目し，東屋が藤沢のメディカルツーリズムに果たした役割を作家・斎藤緑雨（以下，緑雨とする）の記録よりに明らかにすることを目的とする．

２．研究方法

本稿の研究方法を Table1 に示す．

３．割烹旅館東屋の繁栄

かつて藤沢市鵠沼にあった東屋は1892（明治25）年に鵠沼別荘開発の祖と言われた伊東将行によって創業された割烹旅館である．当時の様子を，1898（明治 31）年発行の「風俗画報」では「鵠沼にある旅館を東屋といふ。（略）境の閑静なる、景致秀美、魚は新鮮にして、海水浴すべし、避暑療養の客、徐ろに滞在せむには、江の島よりも優るらめ。（略）」と記している．これは，東屋が広大な庭園を配したことに加え，客室から望む伊豆大島や富士山への眺望が美しい，風光明媚な旅館として知られていたことに依る．1939（昭和 14）年に経営難で店を畳むまで50年弱という短い歴史にも関わらず，今もなおその名前が語り継がれる理由としては，宿泊客として滞在した緑雨の果たした功績が大きいといわれる．緑雨滞在中の東屋には幸田露伴，徳富蘆花，落合直文など，文壇の著名人が集うサロン的様相が呈され，近隣の別荘地とも係わりが深い一大交流拠点となった．

Table1 Outline of the survey(調査概要)　(This is original table by authors)

調査対象	湘南海岸	
調査期間	2017 年 6 月 1 日～2017 年 9 月 30 日	
調査方法	文献調査[1]~[5]	
調査項目	・湘南地域のサナトリウム概要 ・旅館内での行動記録 ・割烹旅館東屋概要	・湘南海岸における療養の記述 ・旅館外での行動記録

４．療養下宿としての東屋と斎藤緑雨

緑雨は1900（明治33）年１月に結核に罹患して以降，1904年に死没するまで各地で転地療養をしていた．東屋には1900（明治33）年10月23日より172日間滞在しており，滞在期間中の全てを「鵠沼日記」に記録している．既に結核患者であった緑雨を受け入れた東屋での暮らしは，サナトリウムのそれと比べて自由度が高いことに加え，美しい眺望と空間快適性を得られることから，良質な療養下宿であったことが窺える．また，文筆業を生業とする緑雨にとって敷地内の郵便局の存在は滞在を決定する最重要事項であったとされ，転地療養者が外部との繋がりを持てることが滞在および療養における活力となったことを裏付ける[3]．以降，緑雨が残した日記「鵠沼日記」における敷地内，施設外の行動記録より，東屋が藤沢のメディカルツーリズムに果たした役割について述べる．

（１）敷地内の行動記録—敷地内の行動記録は12日分みられ，その大半は庭におけるものであった．東屋の庭は，広大な池水を配した日本庭園であり，池周辺の芝生が主な行動場となったことが分かった．具体的には「（略）仕方ナク庭前 鞠ヲナゲテ遊ブ（略）」や「（略）午后庭ニ出デテ女共ト遊ブ」，「（略）子供ト庭デ遊ンダギリ」などが相当する[4]．一方，1912（明治 45）年に家族旅行で東屋を訪れた志賀直哉は文献「鵠沼行」に，庭の池で妹達と舟に乗ったとあること

1：日大理工・学部・まち　2：日大理工・教員・まち

より，東屋の敷地内空間が療養者と観光客の区別なく利用されていたことが分かった．上記の行動以外で敷地内の記述として多く残されていたのが，東屋から望むことが出来る景観についてであり，「廿六日 晴 ケサハ冨士ノ雪増ス(略)」のように，富士山の様子が特に多く記された[5]．次いで江の島の記述が多くみられたが，後述の敷地外行動で記す通り，実際に一度訪れているもののそれほど魅力を感じなかったとあり，その後は景観に関する記述ばかりである事から，江の島は遠景の中の一つとして楽しむものと認識されていたことがわかる．なお，東屋内における療養の記録は入浴に関する者のみであった．

（2）敷地外の行動記録—敷地外の行動記録は 71 件みられ，浜(主に鵠沼海岸)へ訪れたものが 24 件と最多であった．緑雨の浜での行動には，逗子から大磯に至る湘南海岸一帯を眺めながら散策したとあり，これは，当時の結核治療で有効と考えられていた海気療法※2 の一環でなされていたといえる．この他にも，小田原や国府津，東京に訪れた記録があるが，行楽に小田原以外については 1 度訪れる程度であった．また，東京のように通院目的のものが 7 件見られた．以上より，緑雨の施設外での行動は東屋を拠点に東西へ広く展開されているものの，療養に関するものが多くみられた．これは，東屋が近代メディカルツーリズにおける有効な滞在拠点として機能したことを裏付けるといえるであろう．

5．小結

以上より，作家・斎藤緑雨が割烹旅館東屋で滞在した記録をもとに見出された療養下宿としての姿を明らかにした．その結果，敷地外の行動記録より，療養行為を伴いながらも比較的広域かつ自由な行動がとられていたことより，療養者にとっては過ごしやすい環境にあったと推察される．また，施設内は一般観光客と療養者が共存したことからも，前稿の魚民館にみられたような病院色の濃いものではなかったといえ，この点が療養者側からは居心地がよく，好まれて利用されたとみられる．

6．まとめ

本研究では，近代湘南サナトリウム期にみられた療養下宿に着目し，病院や地域と密接な関わりが見られた魚民館と観光客と療養者が共存した東屋の実態を捉えた．両者に共通してみられたは地域において療養下宿の認知がなされていた点と滞在中に療養行為が行える点であったが，東屋に関しては療養者が比較的自由に行動できる一方で，施設内および周辺地域に対する安全への配慮が欠如していたとみられる．以上より，今後メディカルツーリズム発展を目指し新規に医療施設を建設する際には，病院と提携により病気への理解や施設管理等を徹底することで，地域における不安を払拭し，両者の関係が良好となるといえよう．

7．謝辞

本研究は日本学術振興会平成 28 年度科学研究費補助金（若手研究(B)16K18833）の支援により実施されました．ここに謝意を表します．

8．補注・参考文献

【補注】

※1 新鮮な空気と日光とを利用して治療を行う結核療養施設

※2 海浜の清浄な空気を用いた治療方法

【参考文献】

[1]青木純一，結核療養所反対運動と住民意識—大正・昭和前期における公立療養所建設反対運動を比較して—，社会科学年報，(43)，153-167，2009 [2]神奈川近代文学館，www.kanabun.or.jp./material-date/chronological-table/chronologicaltable-05. 2017/8/3 [3]高三啓輔，鵠沼・東屋旅館物語，pp.3~158，博文館新社，1997.11.25[4]斎藤緑雨，斎藤緑雨全集，巻八，pp.115~278，筑摩書房，2000.1.20[5]高三啓輔，サナトリウム残影—結核の百年と日本人，pp.2~48，pp97~121，日本評論社，2004.1.15

Table3 Overview of the Ryokuu Saitou of action at outside the premises (斎藤緑雨行動記録)

地名	件数	記載例
浜 (鵠沼海岸等)	24	(略) シラベ物ス 倦キテ濱ニ出ヅレハ ケフノタ日殊ニ淡々シク 風少シ出デテ冷タク ワヅカニ冨士ノケフ初メテ見ユ(略)
小田原	7	(略) 午后 東京ト稱シテ小田原ヘ 飛ブガ如クニ過ギタカラ山モ海モ ヨク見ヌ(略)
藤沢	4	日曜 寒風吹キツヅク 夕、原稿投函ノタメ藤沢ニ行ク (略)
片瀬	4	(略) 午后片瀬川迄行ク ヨク晴レタリ (略)
病院（鵠沼海浜病院等）	4	(略) 十時頃カラ薄日ガアタリカケタ 病院ヘ體重ヲカケニ行ツタ(略)
国府津	3	(略) 国府津ニテ矧川ニ逢フ (略)
東京	3	東京ニ行キテ 心労ノ結果ナルベシ 太ク疲レテ起キルニ(略)
茅ヶ崎	2	(略) 晝飯ニ時大肝癤 弟ト共ニ茅ヶ崎 鳥ノ足跡多キ例の砂濱(略)
引地川	2	日曜 午前タマツタ新聞ヲ見ル 午後引地川ノ上流ヘ行ク
大森海岸	2	東京より急報來る一時四十分の汽車にて行く神奈川の海大森海(略)
辻堂	1	タニ近ク 午後辻堂ノ濱 四面模糊カスミテ見エヌ(略)
酒匂	1	(略) 夕近ク雲出ヅ 忘レ物シテ取ツテ返ス 酒匂ノ海 紺(略)
大圓寺	1	日曜 大圓寺ニ行ク 弟ト共ニ上田 宵雨フル暁ニハヤンデ居た (略)
浅草上野	1	午前奔走 午後上野浅草 (略)
程ヶ谷	1	(略) 十二時三十分ノ神戸行ニ乗ル 程ヶ谷ヲスギテカラマルデ雨フリ 雨ノ中ニ伊豆ノ山ダケ半分見エテ居タコト
向柳原	1	タヅヌル人多クハ在ラズ 夜フケテ弟ノ家 ココモウルサキコトアリ 燈ノ都 向柳原ニ泊マル
坂本	1	坂本一篠 ウルサキ世カナ 上田ニ面會 坂本ニ泊マル
平塚	1	午前快々 午後女ドモツレテ平塚ニ行ク(略)
境川	1	(略) 午后江の島へ行かんと思ひしも 境川の手前で興ツキテ嫌になりて歸る 冨士模糊トシテ見エヌ(略)
江ノ島	1	玉置夫妻トメ來ル 午前濱ニ石貝拾フ (略) 岩窟に入る(略)
妹の家	1	(略) 買物理髪ニ日をくらす 貝を分ける 妹の家ニ泊まる(略)
戸塚	1	半晴 戸塚へ行ク 黄ナル花 ツマラナイ日
大磯	1	(略) 大磯ヨリ唯一人トナル(略)
鎌倉	1	(略) 午后鎌倉 日ハ汽車ニ暮レテ 夜ノ冨士斜ニ 窓カラ見エル(略)
松圃	1	(略) 松圃へ行ク 夜 雨降出ス 屋根ニ音スル 昨日ヨリモ大粒(略)
三笠亭	1	(略) 淵ガ組ガ竜華シテイル 子女ガ春着ヲキテイル 三笠亭ヘヨル 大山ノ頂ニ潮ノ煙ツタ 一向面白クナイ ヤウナ雲ガアル(略)
計 71 件		

Table2 Overview of the Writer of action at Azumaya (著名作家の東屋での行動記録)

(This is original table by authors)

1900 (明治 33) 年			
10 月 23 日	斎藤緑雨(32)	藤沢鵠沼に転地し東屋に滞在．女中頭金沢タケを知る．滞在中「日記」残す．翌年 4 月に小田原に移る．	「斎藤緑雨全集」8 年譜
1906 (明治 39) 年			
	福田良平	埼玉県吹上市出身の医師=福田良平が伊東将行の招聘で東屋近くに鵠沼海病院を開く．	○
1909 (明治 42) 年			
3 月	福田良平	福田良平が長谷川るいの妹=蝶と結婚する	
夏	今井達夫(5)	父親の療養の為，両親と共に「東屋旅館」の貸別荘で過ごす．	
1921 (大正 10) 年			
9 月中旬	大杉栄(36)	東屋に滞在し，「自叙伝」を書き始める	
1922 (大正 11) 年			
10 月 30 日	大杉栄(37)	東屋に投宿．	「現代日本人詩人全集」5
11 月 6 日	北村初雄(25)	藤沢の鵠沼の東屋に転地療養する．12 月 2 日死去する．横浜総持寺に葬られる．	「現代日本人詩人全集」5
1926 (大正 15/昭和 1) 年			
7 月上旬	芥川龍之介(34)	藤沢の鵠沼に静養に戻り，東屋のイの四号に滞在する．途中一時帰宅する．昭和 2 年 1 月 2 日に帰京する．	「芥川文子追悼芥川龍之介」
12 月	羽仁説子(23)	藤沢の東屋に行き，東屋で転地療養し越年する．	「半生を語る」
1927 (昭和 2) 年			
3 月下旬	芥川龍之介(35)	藤沢の鵠沼に静養に行き，東屋に滞在する．4 月 2 日に帰京する．	「芥川龍之介全集」年譜
1928 (昭和 3) 年			
月日未詳	土方与志(30)	藤沢の鵠沼に行き，友人長谷川路可の実家である東屋で，結核の療養をする．	尾崎宏次，茨木憲「土方与志」
1930 (昭和 5) 年			
12 月 19 日	宮本百合子(31)	湯浅芳子と藤沢の鵠沼に行き，東屋に泊まる．23 日，東屋に滞在中，茅ヶ崎の病院に行く．29 日，鵠沼の「まんじゅう屋の貸家」に移る．	「宮本百合子全集」日記